広報 留萌 1990 4 No.385

特集 予算と市政執行方針の概要

◆連載 いま留萌むかし 第四十話

●学校ことはじめ

初期の留萌住民が教育に対してどんな意識を持っていたかを示す資料がある。

明治十年開拓使札幌本庁管内の教育状況を視察した督学課三吉笑吾は本庁につぎのように復命している。

―同日留萌ニ至ル。主任吉田衡平五等属ニ会シ出張ノ主意ヲ述ベ、併セテ地方人民ノ意向如何ヲ問ウ。吉田氏曰ク、前官佐藤正克教育ニ志アリ、去年少シク着手ノ意見ナリシガ、人民ノ意簿キヨリ其事行ハレズ遂ニ今日ニ至レリト。乃チソノ方法ヲ問ウ。同氏旧記ヲ捜り一書ヲ出セリ。其概略ヲ挙レバ、留萌所轄内ニ是迄建網冥加金ナルモノアリ中世変シテ税ノ一部トナル、然レトモ正税ニアラザルガ故去年是レヲ下戻サントスルニ当リ、以テ部内ノ教育費ニ充テントノ協議書ナリ。可惜当時戸長惣代等教育ノ何物タルヲ知ラズ、人ヲ勧誘スルカモナカリキ。斯テ荏苒数月佐藤氏終ニ教育ノ行ハルベカラザルヲ察シ、転ジテ非常予備ノ社倉ニ与シ、爾後亦教育ヲ説クモノナシト。―

少々引用が長くなったが、明治の早創期のころにはほとんど子弟の教育は顧みられなかったようである。三吉笑吾は教育所の設置に関わる諸経費の積算をなして吉田衡平に与えている。

時は明治政府が明治四年に文部省を設置、同五年に学制を公布し、国の人材育成に力を入れていくことが国の方針として考えられていたころである。当時の辺境であった北海道にも国の方針は通達されていたものと考えられる。開拓使札幌本庁管内で教育所の設置をみていなかったのは留萌分署管内だけであった。

明治十年以前に留萌に教育をする場所がなかったわけではない。明治三年頃、瀬越の坂下に秋田から来た金弥という者が夜間青年子女を集めて読本珠算等を教えたといわれており、明治六年頃には舎熊に元桑名藩士で鈴木仁三郎が二十人くらいの子女に読み書きを教えていたという。留萌からも何人か習いに行ったという。同じころ、有富という人が留萌で寺子屋を開いていたというがつまびらかでない。その後、前述の官吏吉田衡平の息子金吾が旧市街で寺子屋を開き、アイヌの人たちの子女を含め二十人くらいの子女を教育したという。また、栖原の帳場をしていた種市という人も教えたことがあったという

明治十年頃来往した旧会津藩士斎藤軍太夫が近隣の子弟を集めて読書、習字、珠算を教えた。この寺子屋は評判が良く、このため、住民の教育に対する熱意が高まったといわれる。この寺子屋は明治十二年一月に留萌教育所となり、経費は村民の協議費より支出されることになった。

翌年留萌教育所は簡易小学校として学校として認められ、留萌初の学校が誕生したのである。当時の在籍児童は男児二十三名、女児九名の計三十二名であった。吉田笑吾の視察から僅か三年後のことであった。

尋常小学校

平成2年4月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・株式会社 留萌新聞社